財団法人松江市教育文化振興事業団

埋蔵文化財課年報Ⅰ

平成５～７年度

１９９７年３月

財団法人松江市教育文化振興事業団

3．各調査の概要

［釜代（かましろ）１号墳他］番……'93

◆釜代（かましろ）１号墳

標高35mの丘陵上に存在する古墳であり、墳丘南端を欠損しているが、推定20×16m、比高2.5mの規模を持つ楕円形の古墳である。

調査の結果、墳頂部には２基の主体部が並行して存在することが判明し、土層観察の結果、第１主体部が先葬であることが分かった。このうち第２主体部は、長さ6.8m、幅2.8～3.5mを測る大形墓壙中に粘土槨を伴う長さ5.4m、幅0.7～0.55mの長大な割竹形木棺を納めるものであることが判明し、棺内からは彷製内行花文鏡（径11.4センチ）１、碧玉製勾玉１、ガラス小玉67個が検出された。また、鏡背部にはベンガラが付着し、棺内床面の被葬者頭胸部推定位置からはベンガラと水銀朱が検出された。このことから、埋葬時には被葬者の頭胸部には水銀朱が塗布（散布）され、ベンガラで彩色された鏡が副葬されていたことが推定された。

第１主体部直上では小谷式(古墳時代前期)の鼓形器台２、坏６、小型丸底壷１、直口壷２が検出され、サブトレによる観察の結果、第２主体部と同じく粘土槨を伴う割竹形木棺を納めることが判明したが、調査中に本墳の現状保存が決定しため、調査を打ち切ることとなった。本墳の築造年代は、第１主体部直上からの出土遺物から古墳時代前期末と推定される。

釜代１号墳主体部

◆寺津（てらづ）11号墳

標高24mの丘陵上に存在する古墳であり、10×8.5m、比高１mを測る方墳である。工事により削平される墳丘南側半分について調査を実施した。

調査の結果、墳頂部には3.45×1.7mを測る墓壙が存在し、この中に2.3×0.35～0.45mの範囲で小さな河原石が敷き詰められていた。このことから、埋葬時には礫床を持つ箱式木棺が納められていたことが推定される。主体部中及び墳丘からの出土遺物は全く検出されず、築造時期を決定する根拠を欠くが、出雲地方で古墳時代中期に見られる形態を備えたものである。

◆北小原（きたこはら）３号穴

釜代１号墳の存在する丘陵裾部で発見された横穴墓である。前庭部堆積土を半掘し、羨門部を検出した段階で現状保存が決定したため、前庭部堆積土の土層を記録した段階で調査を終了した。よって調査は玄室内部まで及んでいないが、羨門部からの観察では整美に加工された玄室を持ち、床面には

板石の屍床を三方に配した構造であるように見られた。

［菅沢谷（すげさわだに）横穴群］……'93

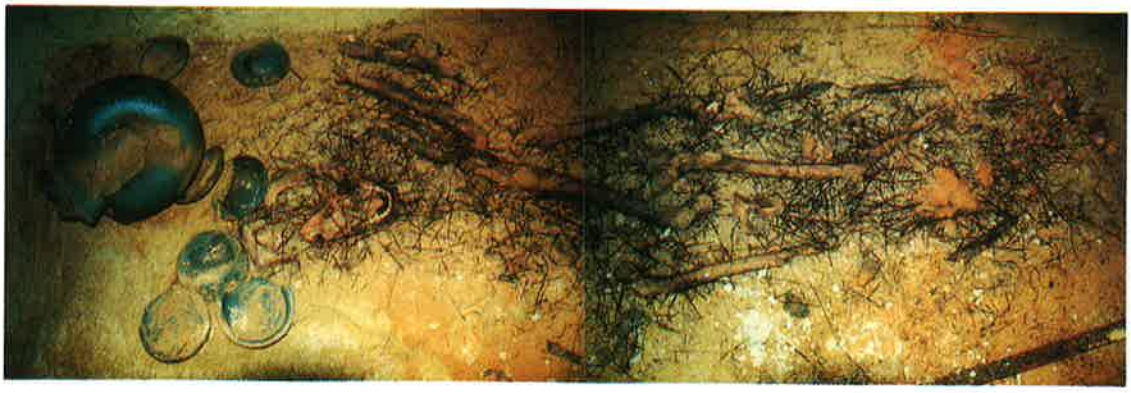
菅沢谷横穴群は、松江市の南東乃木地区に広がる標高120mの丘陵東斜面に、標高55～65m、幅約100mにわたって構築された12穴の横穴群である。

出土遺物は全体で坏身41、坏蓋22、平瓶１、坩５、高坏11、提瓶６、横瓶１、壷３、高台付坏２、輪状蓋１、直刀３、刀子６、鉄鏃16、鍬先金具１、鉄釘４、耳環７、土師壷１、土師高坏１、はそう３であった。

大型の提瓶は隣接する田和山１号墳で出土したものと、大きさ・形状がよく似ていることが注目される。また唯一安置されていた石棺の材質は安来市荒島石系の組成を成し、同じ乃木地区にあった向荒神古墳で検出された石材とともに、この地域との関係が推察される。

横穴群中の３穴には計９体の古人骨が遺残しており、男性４体・女性３体・10代前半位の子供２体・性別不詳の人骨１体が認められた。

出土遺物の特徴や石材及び立地条件から、この横穴群は６世紀後半から造墓され７世紀前半頃まで２世代にわたり構築されたものであろうと推察される。

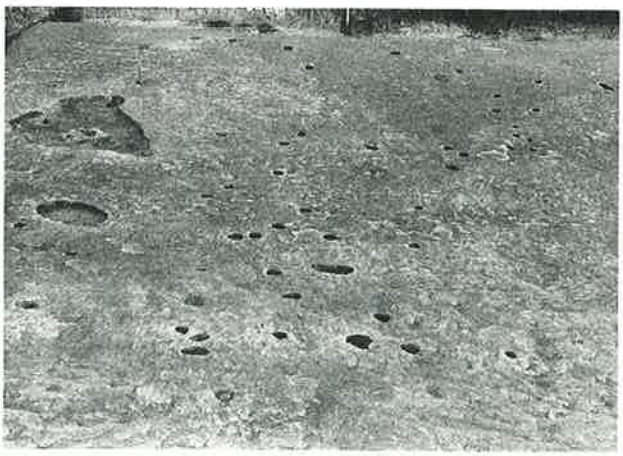


Ｃ－１号横穴墓人骨

［向（むかい）遺跡］……'93

向遺跡は松江市国屋町339番地にあって、月照寺と法眼寺の立地する低丘陵の西側谷筋の低湿地に位置する。標高は14～16m。検出した遺構は掘立柱建物10棟、土壙10、溝状遺構５、不明遺構３、井戸状遺構２。

掘立柱建物は規模２間×１間～２間×２間のものが殆どで、全容を確認できる建物は３棟。伴出した遺物は須恵器片の他に古式土師器片が少量出土。



掘立柱建物跡

溝状遺構では山本編年３期の坏身、坏蓋が出土した。土壙からは、回転糸切り痕の残る平底の坏を主体とする須恵器片が多く出土した。小谷式の特徴を持つ甕、高坏片の出土した土壙もあった。

遺跡全体では須恵器が大部分を占め、土師器、土錘、少量の中近世土器が認められるという状況である。

出土した須恵器の特徴から主たる遺跡の時期は奈良～平安時代にかけてのもので、検出された遺構の状況からこの時期に何らかの生活が営まれていたものと推察される。

［論田（ろんでん）４号墳］……'93

論田４号墳は松江市西津田10－1432－1に所在した。周辺には４号墳を含めて４基の小古墳と５穴（以上？）の横穴墓群が確認されている。古墳時代後期の聖墓域の一角に位置していたといえよう。

調査は、平成５年度、松江市教育委員会の金山主事が中心となっておこない、江川がこれを助けた。結果として、論田４号墳は緩斜面に築かれた直径約8.5mの円墳で、主体部は木棺直葬、斜面の高い側には、三ケ月状周溝が掘られた後期古墳であることがわかった。ただし、主体部は、約４×２mの段を有しない単純掘りで、墳丘の規模から比べるとバランス的にやや大きめで、これ迄にはあまり類例を見ない形態のものである。

副葬遺物は、須恵器の蓋杯９個体のみであった。底や天井部には丁寧な回転へら削りが施工されており、論田横穴墓群に先行して築かれた古墳である事が確認できた。

論田４号墳墳丘検出状況

［柴尾（しばお）遺跡］……'93

柴尾遺跡は松江市上東川津町松本1252に所在する。調査は、平成５年度、３ケ所のマウンドとその周辺域について実施した。

その結果、１つのマウンドは自然地形であり、他の２つのマウンドについては古墳である事が確認できた。１基は１辺約８mの方墳で、主体部が残っていなかったが、盛り土層は明瞭に確認できた。山側の一辺に掘られた周溝内地山直上からは須恵器甕片が出土しており、古墳時代後期の築造であった。もう一基は一辺約８mの方墳で、２辺に深い周溝が掘られていた。周溝内からは古式土師片が多数出土したほか、墳頂からも供献土器が出土し、古墳時代前期の築造と判明した。主体部は３カ所検出され、うち２つが割竹形木棺を据えたと考えられる二段掘り土壙、あと一つは組み合せ式木棺を据えたと思われる目張り粘土の残る２段掘りの土壙が検出された。副葬品は初葬と考えられる土壙から

柳葉形鉄鏃一点が出土した。

古墳の周辺の平坦地を調査すると、黒曜石を主とした多数の石器、剥片が出土した。縄文時代後期の石器生産遺跡と考えられるが、遺構は検出されなかった。

石器生産遺跡はさらに広い範囲に分布する可能性が高く、調査範囲の片隅には新たに古墳の周講が確認されたため、調査は次年度へ継続させる事となった。

柴尾２号墳

［角森（つのもり）遺跡］……'93

角森遺跡は松江市八幡町字角森に所在し、標高15m前後の低丘陵上の緩やかな南向き斜面に位置している。現状は原野であったが一部は畑地として耕作されていた模様である。

平成元年にさんもく工業がこの地一得に角森団地造成工事を計画し、同年８月松江市教育委員会に分布調査を依頼したので、それを受けて９月に分布調査を行った。さらに10月、11月に試掘調査を実施した結果、弥生時代後期から古墳時代にかけての遺物包含層が発見され、角森遺跡と命名された。

平成３年度に至り、株式会社トーヨー産業が角森遺跡を西端に含む一帯に角森宅地造成工事を計画したので、同年11月市教委による試掘調査を行い、遺跡の範囲がさらに東方に広がることが判明したため、開発予定地内の全面発掘調査が必要となったものである。

調査当初は弥生時代後期から古墳時代にかけての遺跡であろうと予測していたが、調査の結果では弥生時代の後期前半から後半にかけての土器が出土し、古墳時代の遺物は見られなかった。

調査区外の北から北西部は現在は墓地になっているが、この丘陵の尾根筋にあたるので、そこに弥生時代の何らかの遺構（住居跡等）があって遺物が調査区内に流れ込んだものと考えられるのである。

調査地全景

［敷居谷（しきいだに）古墳群］……'93

敷居谷古墳群は標高31～40mの丘陵尾根筋上に存在する方墳５基からなる古墳群である。平成５年度においては１、２、５号墳について調査を実施した。

◆敷居谷１号墳

半壊の状態で発見された古墳であり、南北長12.5m、比高1.4mを測る方墳である。主体部は後世に撹乱を受けた様子であったが、一部に残っていた墓壙残存部から推定すると、幅2.5m、長さ4.5m以上の隅丸方形の墓壙の中に、周辺に散乱していた拳大～人頭大の礫を用いた礫槨状の施設が存在していた可能性が考えられた。主体部中の出土遺物はなく、築造時期は不明である。また、墳丘南北辺を巡る周濠中から８Ｃ代の須恵器杯類、甕が出土しているが、後世の祭祀に関連する遺物であると考えられる。

◆敷居谷２号墳

墳丘南西隅部分を欠損した状態で発見された古墳であり、一辺12m、比高1.2mを測る主体部が検出されたが、出土遺物は検出されなかった。また、墳丘裾部を巡る形で周濠が検出されたが、東辺部で須恵器の高坏片、長頸壺片、甕片が検出されたのみであり、築造時期を決定するには至らなかった。

◆敷居谷５号墳

墳丘西側が一部削平された状態で発見された古墳であり、一辺９m、比高1.2mを測る方墳である。主体部は東西に主軸を取り、2.15×0.35mを測る狭長な主体部が検出されたが、出土遺物は検出されなかった。しかし、墳丘を巡る周濠中では、南コーナー部分から東辺部分にかけて５Ｃ末の須恵器蓋坏２組が検出され、築造時期に当てることができた。また、この周濠付近では８Ｃ代の須恵器坏、皿も出土しており、後世の祭祀に関連するものと考えられる。

敷居谷５号墳

［出雲国分寺跡］……'93

史跡出雲国分寺跡は大正10年３月３日に指定された国史跡であり、昭和30～31年、昭和45～46年の発掘調査の結果、500尺の寺域に金堂跡、講堂跡、僧坊跡、塔跡、南門跡、中門跡、回廊跡、瓦敷道路を配した伽藍及び南門から南方に延びる天平古道が確認されている。

松江市が計画した特殊林道井ノ奥～上竹矢線開設事業の予定地の一部が史跡出雲国分寺跡の隣接地にあたるため松江市竹矢町字寺領105－1番地外の発掘調査を実施したが、その結果１ケ所の溝状遺構

と瓦溜まりを検出した。溝状遺構は長さ15.2m、上端幅0.4～1.5m、深さ0.6～0.7mを計り、埋土の灰色砂質土より土師器、須恵器、土師質土器、瓦類が多量に出土したが全て破片で摩滅したものが多かった。これに対して、瓦溜まりでは土器類は殆ど出土せず、完形または大形でしかも摩滅していない瓦類が灰色砂質土中より多く出土した。この溝状遺構の形状及び出土遺物などから本来自然流格であった河川を国分寺の寺域内に取り込んで生活用水として利用していたと考えられる。また瓦溜まりについては使用前の瓦を備蓄していた場所の可能性が高いことから国分寺の西側寺域はさらに西側に広がるものと推察される。

溝状遺構

［深田（ふかだ）遺跡］……'93

深田遺跡は松江市大庭町にある松江総合運動公園の南東に隣接する三つの丘陵のうち、最も南の丘陵上の東端寄りに位置する。標高は約32～38mであり、東方に広がる水田との比高差は15～20mある。

検出された遺構は溝状遺構６、円形土壙列１、小ピット群、炭焼き窯状遺構１である。溝状遺構については埋土最下層に締まりがあり踏み固められたものではないかと思われること、遺構の底面に円形の土壙列をもつものがあるが最近の発掘調査に類例が見られることなどから、円形土壙列のみの遺構も含めていわゆる道路状の遺構と考えられるものである。機能していた時期は出土した須恵器から奈良、平安時代頃と考えられる。

炭焼き窯状遺構についてはいわゆる「こ炭焼き」の窯の長いものであると考えられる。「こ炭焼き」というのは自家消費用の炭を地面に穴を掘って生木を詰めて焼いていたもので、周辺から江戸時代を中心とする陶磁器片が出土しているので近世頃のものかと思われる。

道路状遺構

［岩汐峠（いわしおとうげ）遺跡］……'93

岩汐峠遺跡は松江市大井町106－2外に所在する。岩汐峠は古墳時代における須恵器の一大生産地である大井町と、隣接する朝酌町とを結ぶ陸路の最短コース最高位の場所である。したがって、古代の道、及びそれに関連する遺構の存在を考慮して、発掘調査を実施した。その結果、後世における畑地作り等によって、大きく地形が変えられていたため、古代の道に関する遺構を検出する事は出来なかった。

ただ、峠頂においては、礫石経塚を１ケ所確認する事が出来た。それは、大きな自然石を利用して一辺約４ｍの石囲いを作り、その中に墨書石を含む礫石を大量に入れたものである。墨書石は大部分が一字一石であるが、中には多字一石も認められ「法界万霊」「松吉」等、解読できるものもあった。文字には３、４人分の筆跡が認められた。共伴遺物は、土師質土器、宋銭７枚で、土師質土器の形態、寛永通宝が見られないことから、礫石経塚としては古いもので、16世紀頃の遺構と考えられる。

一字一石経塚

［出雲国府跡］……'93

南北に走る市道国府９号線拡幅に伴い、工事対象区域である東西道路沿いの水田部分にＴ－１（西側）、Ｔ－２（東側）を設定して調査した。調査地点は、国府復原図によれば南門の東側に隣接する地点である。

調査の結果、Ｔ－１、２ともに20センチ程度の水田耕作土を除去すると、灰褐色～青灰色の粘質土が最大80センチの厚さで堆積しており、最下層は砂礫層で涌水が著しく、旧河川状の様相を呈していた。出土遺物はすべて破片で磨滅しており、原位置を保つものはないが、粘質土中から古墳時代後期～中近世に至る土器類、陶器類、瓦等がコンテナ１箱分が出土した。

遺構としては、Ｔ－２の北端部分の砂礫層上面から柱穴２箇所と砂礫層中から柱根２本が検出された。柱間距離1.95ｍを測るこの２本の柱根は、径10センチの自然木を利用した横木で連結され、更に横木は調査区外の西方へも取り付けられて延びる。また、２本の柱根それぞれには、前述の横木に直交する形でホゾ穴が設けられ、市道下部方向（西方向）

井ゲタ状の構造物

にも横木が差し込まれている。このことから、道路下にも同規模の柱根があり、これらを横木で井ゲタ状に連結した一間以上の構造物が存在することが推定された。しかし、この構造物の方向は、国府跡の建物群の方向より東へ振っていることがら、国府に関連する施設との関連性は薄く、また、旧河川状の砂礫層に立地することから、柱脚、舟着場等の施設であった可能性も考えられる。

［勝負谷（しょうぶだに）遺跡］……'93

勝負谷遺跡は松江市大庭町地内に所在し、松江総合運動公園の南東に隣接する三つの丘陵の内、一番南側の丘陵の尾根上から北斜面に位置している。標高は48～52mである。今回は尾根筋が南東から南西寄りにカーブする地点から西側部分の調査を行い、さいの神と積石の塚、道路状遺構２が検出された。

さいの神と積石の塚は隣接して位置しておりこれらは別々のものではなく、境の神を祭る積石の塚が後年になってその前面にお祭りの中心が移って行き、石碑が置かれたり祠が設けられたりしてこちらがさいの神として意識されるに至ったものと考えられる。積石の塚からは須恵器の甕片、瀬戸焼皿、古銭等が出土し、さいの神からは土鏃、陶器、寛永通寶を中心とする多量の古銭、かわらけ、陶器の馬、炭、さざえなどが出土している。

また、さいの神の直下を通り、調査区のほぼ東端から西端まで伸びる道路状遺構が見つかっている。これは地山をＵ字状から逆台形状に加工したもので上端幅1.3～3.7m、下端幅0.2～1.5m、深さ0.4m、検出全長約60mを測る。埋土の最下層は部分的にではあるがかなり締まりがあり、砂利が地山にめり込んでいる箇所もあって、踏み固められた結果であろうと思われた。遺物は埋土中や地山上から須恵器片のみが出土しており、甕片、輪状つまみの蓋などがあることから古代の道ではないかと考えられる。

さいの神

［松江北東部遺跡（本庄地区）］……'93

島根県松江農林事務所では昭和62年度から10ケ年計画で本庄川流域の水田地61.4haを本庄地区県営圃場整備事業をおこなっているが、この平野一帯では「本庄川流域条里制遺跡」、「原ノ後遺跡」が周知されていたことから昭和62年度から年次計画的に発掘調査を実施しており、その結果新たに古墳時代の住居跡の「的場遺跡」、古墳時代から奈良時代の遺物散布地の「京殿遺跡」が発見された。

今年度は松江市上本庄町1456－3番地にある「京殿遺跡」の南側、8工区（10×2m×20本）・13工区（10×2m×20本）の範囲確認調査をおこなったが、「本庄川流域条里制遺跡」を示す畦畔などの遺構や「京殿遺跡」の性格を確定するような遺構は検出しなかった。

出土した遺物は土師器、須恵器、弥生式土器、土師質土器、陶磁器などであるが、その殆どが耕作上下のごく浅い層から細片で摩滅して出土していることより北側の微高地からの流れ込みと思われ、それらの時期を特定できる遺物は僅かであった。

これらのことより、周知の遺跡である「京殿遺跡」の南限はこの調査区よりも北側であることが分かった。

調査地近景

3．各調査の概要

［柴尾（しばお）遺跡他］……'94

◆柴尾遺跡

柴尾遺跡は、標高約34mの丘陵尾根上に存在する遺跡で、平成５年度における遺跡北半分の調査の結果、遺物包含層及び土壙から縄文時代早期の黒曜石製遺物が多数発見され、石器製作関連遺跡であると推定された。平成６年度においては、遺跡の性格を更に究明するために南半分を対象として調査を実施した。

調査の結果、遺物包含層と土壙４基を検出し、包含層中から黒曜石製石器（石鏃８、スクレイパー２、未製品１）、黒曜石製剥片(二次加工ある剥片１、使用痕ある剥片１、剥片54)、安山岩製石鏃１、敲石１を検出した。この結果、平成５年度からの合計は142点となり、うち97.9％が黒曜石（石鏃11.5％、スクレイパー５％、その他製品及び未製品２％、石核１％、剥片類78.4％）であった。また、蛍光Ｘ線分折の結果、32点の試料中隠岐久見産29点、隠岐加茂産１点、不明２点という結果が得られ、他地域産出の黒曜石は流入していないことが判明した。遺跡の性格については、平成５年度に検出されたＳＫ－ＯＩは土壙中から石鏃２点、剥片多数が検出されたにもかかわらず、平成６年度においてはＳＫ－Ｏ４からの石錐１点にとどまり、また住居（工房）跡が検出されなかったため、工人集団の規模、生産形態等は明らかにし得なかった。しかし平成６年度の新たな知見として、調査区東端の包含層中から縄文時代早期末の縄文土器片が検出されたことによって、工人が存在した可能性がより高くなったことと、年代的な位置付けができたことは有意義であった。

柴尾遺跡全景

◆柴尾古墳群

柴尾古墳群は、１～３、６号墳が柴尾遺跡と同丘陵上、４、５号墳は同丘陵上北方約150mの地点に存在する。このうち１、２号墳は平成５年度に調査を実施し、それぞれ古墳時代後期、古墳時代前期末の方墳であることがわかった。平成６年度においては３～６号墳について調査を実施した。

調査の結果、３～５号墳は古墳時代前期末、６号墳は古墳時代中期以降の築造であることが判明したが、特に３号墳は、一辺10mの小規模な方墳であるにもかかわらず、内部主体に２基の割竹形木棺（第１主体：2.6×0.7m、第２主体：2.85×0.65m）を埋納していた。そのうち第１主体部では鉄鏃１の他にヒスイ製の勾玉が１個出土した。この勾玉は蛍光Ｘ線分折の結果、新潟県糸魚川産出の原石を用いたものであることが明らかとなった。近年、ヒスイ製玉類に関してはＸ線による分折が進んでおり、全国的に古代の玉作りにおいて使われるヒスイは、そのほとんどが糸魚川産出の原石によるもの

であることが明らかにされ、ヒスイ原石をめぐる古代の地域間交流が想定されているが、山陰地方にもそのルートがあったことを窺わせる資料として有意義である。

［敷居谷（しきいだに）古墳群］……'94

敷居谷古墳群は松江市街地北方、東生馬町の低丘陵上に位置する方墳５基からなる古墳群である。

３号墳は１辺12m、墳裾からの最大比高差1.4mを測る。四方に周溝を巡らしており、旧表土上面に周囲を削った土を盛土として利用したものと思われる。周溝内には淡黒褐色の堆積土が見られ、北側周溝北肩部から溝底にかけて土師器の高坏が７個体、坏２個体が検出されており、破片の散乱も見られなかったことから本来この位置に供献されたものと思われる。また、土師器には赤色顔料の付着が見られるものがある。

主体部は長大な木棺を擁した二段掘りが行われており、棺を埋納した段階において直刀一振、棺内に刀子一個体をそれぞれ副葬しており、敷居谷古墳群中他に類例を見ない埋葬施設であり、３号墳は傑出した存在ではなかったかと思われる。

４号墳は１辺９m、墳裾からの最大比高差1.5mを測る。築造方法は３号墳とほぼ同様である。周溝北側底部において丹塗りを施した土師器の高杯５個体が検出されており、供献用土器の性格をおびているものと思われる。

主体部は主軸をほぼ南北にとる隅丸方形状の土壙が検出され、土壙内より黒褐色土が堆積していることから木棺が腐朽したものと思われ、埋葬施設は木棺直葬と思われる。

敷居谷４号墳

墳裾西側周溝上より石組遺構が検出された。主体部と同様ほぼ南北に主軸をとっており、内部より土師器・須恵器の細片が数点、この遺構より同レベル北側において須恵器（坏）細片が散乱して出土しており、この地点において葬送儀礼が行われたものと考えられる。

築造時期について３号墳は古墳時代後期初頭、４号墳は古墳時代中期末と推測する。

［松江北東部遺跡］……'94

昭和62年度から本庄地区県営ほ場整備事業として、松江市上本庄町の本庄川周辺の水田地61.4haを整備することとなったが、本庄平野一帯が「本庄川流域条里制遺跡」として周知されており、それに伴って昭和61年度より工事区域内一帯の試掘調査を実地することとなり、同年度に本庄平野東端に位置する低丘陵上に「的場遺跡」が、平成２年度に古墳時代の竪穴式住居跡・古墳等が、平成４年度に

本庄平野北部に古墳時代から奈良時代を主体とした遺物散布地「京殿遺跡」がそれぞれ確認された。平成６年度においては松江市本庄平野南側（７・８工区）において、10×２ｍのトレンチを40本設定して試掘調査を実施した。上層の堆積状況については、いずれのトレンチも表土は水田の耕作土で、その下部は茶褐色及び灰褐色を主体とする粘質土であり、最下層は転石（河原石）を含む自然堆積物の砂礫層によって形成され、同時に近年行われた土地改良の痕跡が垣間見られる。

遺物については弥生式土器、土師器、須恵器といったものが出土しているが、摩滅が著しく、細片で出土するものがほとんどであった。若干残存状況のいいものから考察するに弥生時代中期～古墳時代後期の遺物と考えられる。

各トレンチより出土している遺物は摩滅が著しく、トレンチ下部の土層断面より砂礫層や礫・転石が確認されており隣接する本庄川の影響を強く受けたものと推測する。

トレンチ調査の状況

［米坂（こめさか）遺跡］……'94

米坂遺跡は松江市西尾町字米坂750－3に所在する。平成６年度に調査を実施した。この年は例年にない全国的な大干ばつの年で、堅い土と、ひび割れた地山面での遺構探しには非常に苦労した。現況竹林となる前は、畑作が行われていたらしく、出土した土器はいずれも細片化していた。また、地山面もかなり耕作の影響をうけていると思われ、遺物が原位置を動かずに出土したのはわずかな範囲に限られた。

米坂遺跡は、古墳時代中期から後期にかけての集落跡であるが、須恵器の坏を観察すると、底に丁寧な回転へら削りを施したものばかりが出土しており、それより新しいタイプのものは出土しなかった。したがって、古墳時代の後期でも比較的早い時期まで集落として営まれ、その後廃棄されたものと考えられる。

遺構については、ピットが多数検出されたが、現時点では建物になる並びは確認できていない。

米坂遺跡全景

［舟津（ふなつ）横穴群］……'94

舟津横穴群は松江市薦津町801に所在する。急傾斜地整備のために重機で削り掘りを進めていたところ、５ケ所で横穴の開口が確認された。早速工事を中断し、平成６年10月、発掘調査を実施した。

いずれも急傾斜地の高いレベルで開口していたため、古代の横穴墓であろうと確信していたのだが、いざ蓋を開けると、何と、うち３穴までが俗称いも穴（？）であった。いささか気落ちしたが、「昨日迄が考古学の対象だ」という恩師の言葉を自分に言い聞かせながら、初心にかえっていも穴の調査を行った。遺物はほとんど残されていなかったが、江戸時代末期を下ることはないだろうと思われる陶器片１片が出土した。おそらく江戸時代末期から明治時代にかけて使用されたものと考えられるが、明治生まれの土地所有者の方は、それらのいも穴については全くご存知なかった。既に名実ともに土の下に埋まっていたのだ。

急傾斜地整備事業と共に、これらのいも穴の存在が歴史の彼方へ葬り去られることなく、存在の確認、図面の作成までが出来た事は大きな成果だと思っている。これも薦津町の庶民の歴史の一つなのである。

近世の貯蔵穴

［筆ノ尾（ふでのお）横穴群］……'94

筆ノ尾横穴群は松江市の北西、宍道湖岸から北に1.5kmほど入った標高120mの丘陵南斜面に幅10m、標高80～90mの範囲に三段６穴が密集して構築されている。遺物は総数125個。内訳は坏身32、坏蓋34、平瓶２、高坏８、提瓶３、はそう４、坩３、輪状蓋９、擬宝珠蓋４、高台付坏６、壷類８、鉄鏃４、直刀１、刀子１、耳環２、碗１、銅製品１、その他鉄製品２であった。

古人骨が遺残していたのは１穴のみであるが推定６体の人骨が散乱した状態で発見された。埋葬順序は不詳であった。この横穴群では須恵器の出土状況に特徴が見られたので、そこからいくつかの種類に分類した。そうしたことから追葬の多い横穴では少なくとも３度埋葬が行われたようである。時期的には６世紀後半頃から造墓が始まり７世紀中頃まで続いたものと推察される。東長江町地内での横穴墓の発掘調査はこの筆ノ尾横穴群が初例であり、今後の新たな展開が期待される。

調査中の横穴群

［寺の前（てらのまえ）遺跡］……'94

寺の前遺跡は松江市山代町字寺の前248－8外にあり、山代郷南新造院（四王寺）跡のある山代町字師（四）王寺の南西隣接地に所在する。

検出された遺構は近世以降の土留の杭列のみであった。遺構以外には乃木礫層とその上に乗った粘土層の地山面で自然流路４本が見つかっている。

遺物は流れ込みと客土によるものと判断され、遺物包含層と地山上、自然流路の一部で布目瓦、近世瓦、須恵器、土師器、土師質土器、貿易陶磁器、国産陶磁器などが入り混じって出土している。大半は摩滅の進んだ布目瓦の破片である。瓦類のうち軒瓦は軒丸軒平ともに四王寺分類のⅠ類とⅡ類があり、丸瓦平瓦はいずれも小片で完形になるものは皆無であった。特筆すべきものとして陶製鴟尾の小片がある。須恵器は古墳時代後期から中世にまでわたるが中心は奈良・平安時代にあり、使用痕の著しい円面硯が注目される。貿易陶磁器は12世紀代の中国産の白磁碗・皿類を中心とするものである。国産陶磁器は16世紀末から19世紀代のものが各種出土している。

貿易陶磁器

本遺跡は四王寺跡の南西に隣接しており四王寺関係の遺構の有無が懸念されたが、調査の結果遺構はなく、寺域外であることが判明した。今後四王寺跡の範囲を確定していく作業の一環となる意義のある調査であったといえよう。

［黒田畦（くろだうね）遺跡］……'94

黒田畦遺跡は松江市南郊の大庭町字黒田244－1にあり、「出雲国風土記」に「神奈備野」と称される茶臼山の南西麓から続く標高20数mの台地上に位置する古代から近世にかけての複合遺跡である。土壙群、土壙墓群、掘立柱建物跡、柵列、ピット群、溝などが検出されている。

奈良時代のやや不整な円形土壙からは須恵器11個（「云石」＝「飯石」かと推定される墨書土器を含む）、丹塗土師器１個が伏せた状態で発見された。土壙をある程度埋めもどした後土器を一括埋納しており、祭祀に関連する遺構かと考えられる。埋納された土器群は律令様式の土器と在地の土器の併行関係がわかる良好なものであり、８世紀中頃から後

ＳＫ－10

半の標識資料になるものと思われる。他にも赤彩土師器や製塩土器を含む多量の土器を廃棄した土壙群があり、近辺に古代の公共施設か官人層の館跡などが存在する可能性が高い。

土壙墓６基は古代の土壙を切って作られている。古銭（咸平元寶、聖宋元寶、開元通寶、洪武通寶、無文銭）、土師質土器、鉄製角釘などが出土しており、中世後期に相当するものと考えられる。

掘立柱建物、柵列、ピット群、溝中からは16世紀末頃の輸入品を含む陶磁器類が出土しており、土壙墓群と前後する時期の遺構のようである。

［二名留（ふたなどめ）遺跡］……'94

二名留遺跡は松江市乃木福富町735－15に所在し、宍道湖岸に沿って南北に伸びる丘陵の南東に落ち込む谷に位置している。現状は山林で標高は17～28mを測る。試掘調査によって谷奥部の緩斜面に２層にわたる遺物包含層（須恵器、土師器）が検出されたことにより発掘調査を実施したものである。谷に面した北斜面、南西斜面には遺構も遺物も皆無であった。試掘時に遺物が出土した谷奥部のトレンチを拡張し、さらに谷底にむかって延長して調査した結果、表土～第３層中より古墳時代後期頃の須恵器片（坏蓋、壺、甕等）、土師質土器（摺鉢他）、18世紀以降の陶器片（布志名焼のボテボテ茶碗、火鉢になる可能性のあるもの等）、玉髄質の剥片など若干の遺物が出土した。それらの遺物は表土から第３層までの各層に混在して発見された。第４層以下地山面まではすべて無遺物層である。第４層上面までの各層において遺構は全く検出されなかった。第４層以下で唯一遺構の可能性のあるものとして第18層より落ち込んだ摺鉢状の土壙があるが、遺物は無く、用途・時期ともに不明である。以上の調査結果から、第３層までに出土した少量の遺物は近世以降に谷奥部北西の斜面又は尾根部より流れ込んで堆積したものと判断され、北西の調査区域外に本遺跡に流れ込んだ遺物に関係する古墳時代～近世の遺構の存在する可能性があると考えられる。

調査地近景

［向山（むこうやま）１号墳］……'94

松江市街地南東方向、大庭町の低丘陵上の南向き緩斜面標高20mに向山古墳群は位置する。

本墳は造成工事のため、墳丘の大半は削平されており墳丘・規模はともに不明であるが、北側及び西側に設定したトレンチより考察すると方墳と仮定するならば30m以上の古墳と思われる。

墳丘構造として盛土は明褐色粘質土と暗褐色粘質土を交互にもった版築状になっており、盛土内に流土を防ぐための礫が混入していることから非常に丁寧な造りが見受けられる。主体部は出雲地方独特の埋葬施設で、主軸をほぼ南北にとり、入口を南向きに設けた石棺式石室が複室構造状を呈するほぼ完全な形で確認された。玄室・羨道は屋根形に整形加工がされており、凝灰岩を使用している。主体部北側において表上下1.1mよりほぼ同レベルにおいて山石が玄室に向かって数個南北方向一直線に並んで検出されたが、用途は不明である。玄室はほぼ正方形のプランをしており、各壁・天井石ともに１枚石で、人頭大の山石を使って玄室を支えているものと思われる。天井石の外面には縄掛突起らしきものは見受けられなかった。

羨道の羨門は多数の礫を詰めて閉塞してあり、土層断面より撹乱の痕跡もないように思われることから未盗掘の可能性が強いものと思われる。羨道東端上及び東側より子持壷がほぼ完全な形で出土している。

葺石・埴輪は検出されなかったが、墳裾西側と思われる箇所から須恵器・土師器細片が数点出土している。本墳の築造年代については、出土した子持壷の年代観及び石棺式石室が複室構造状で似たような石棺式石室を持つ山代方墳、永久宅後古墳を参考にして推測すると６世紀後葉から７世紀前後と思われる。

羨道天井石と子持壷

3．各調査の概要

［向山（むこうやま）古墳群］……'95

平成６年度の調査で未盗掘の可能性のある石棺式石室が発見され、版築状の墳丘が確認された（１号墳）ため、埋葬施設の調査と墳丘規模、形状、外部施設の有無等の調査を行ったものである。また１号墳の西側に位置する２、３号墳の範囲確認調査も同時に実施した。

１号墳の墳丘規模は推定で東西約32m、南北20m以上あり、二段築成の可能性のある大型方墳である。丘陵南向斜面を傾斜を生かした形で斜めに削平して墓域とし、さらに石室の後方６m地点から平らにして墳丘基盤としている。基盤上では土師器と青メノウが見つかっており、祭祀が行われたものと見られる。

盛土は数回に分けて行われており、まず側壁石を立てて裏込め石を置き、黒褐色系統の粘質土を壁石上端近くまで積んだ後天井石を乗せ、石の合わせ目を白色粘土で目張りをする。さらに暗茶～黒褐色土を天井石の所まで積み上げ、そののち黄褐色土と黒褐色土を交互に盛って墳丘を築成している。

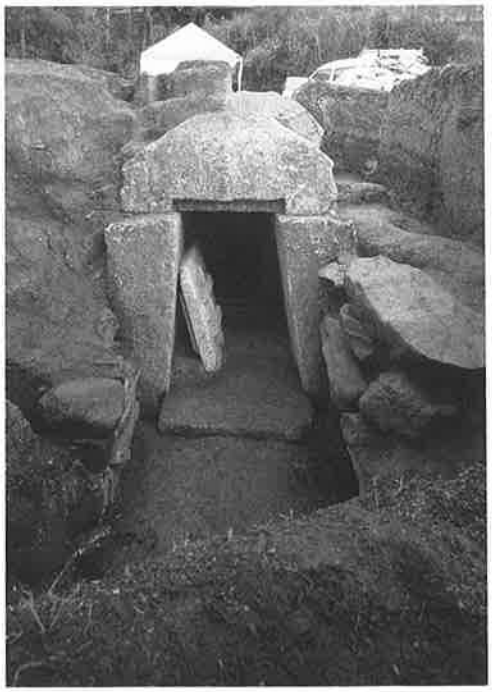
外部施設としては須恵器の子持壷が墳裾付近から10数個体分出土しており、円筒埴輪と同様の用い方がなされ、古墳の周りに多数立て並べられていたものと考えられる。

埋葬施設は凝灰岩の切石を組み合わせた玄室と羨道、自然石の割石を積み上げた前庭からなる石棺式石室で南に開口する。玄室左壁に沿って石棺を組み込んでいる。羨道では玄門に使ったと考えられる「門」状の陽刻をもつ閉塞石が発見された。

副葬品はかき出されてすべて細片であるが、馬具、武器、玉、須恵器が見つかっている。また初葬時には前庭で多数の須恵器を用いて墓前祭祀が行われた模様である。これらの須恵器の年代観からすると、この古墳の築造時期は６世紀末と考えられる。埋葬回数は１～２回であるが、２回目の副葬品は１点もなく、片付けただけの可能性が高い。

この向山１号墳は墳丘規模、石室の作り、副葬品などからみて、首長クラスの人物の墓と見られる。「山代・大庭古墳群」の一角に位置付けられるものであろう。

当初２号墳としていたマウンド状の高まりは古墳ではなく、中世後期以降に作られた遺構であった。当初前方後方墳と考えていた３号墳は１号墳と並んで築成された方墳の可能性が高くなった。埋葬施設、規模等は確認できなかったが、版築状の盛土や墳裾に倒れ込んだ状態の子持壷が発見されている。３号墳を改め、２号墳と呼称する。



石室全景

［遅倉（おそくら）横穴墓群］……'95

これまで横穴墓群が発見されていなかった朝酌地区において、初めて発見、調査を実施した横穴墓群である。

地山は岩を多く含む粘土質で、横穴墓造営の際はさぞかし掘りにくく、崩落し易かったと考えられる。事実、遺構を検出した時点でも、１穴を除いては天井の崩落が著しく、玄室、羨道全てが落ち込んだ土で埋まっている横穴墓もあった。調査中もドサッと天井が剥落してくることがあり、内部調査は薄いヘルメットに祈りを託し決死の覚悟で臨んだものである。

調査結果は、横穴墓５穴と落とし穴１ケ所を検出した。

横穴墓は６世紀後半のものが中心で、１穴については７世紀前半まで追葬をおこなっている。山陰地方では比較的古い時期に造営された横穴墓群で、鳥取県江府町北谷ヒナ横穴墓群などで確認されている山陰地方初現期タイプの内部構造をもつものが含まれていた。立地的に須恵器生産地に近い場所に位置していることが関係しているのであろうか、屍床はすべて須恵器床で、須恵器の副葬・供献が多く、それ以外の副葬品は少なかった。

調査範囲内では５穴のみを確認、調査したが、調査範囲外の斜面上方には馬蹄形の凹地が数ケ所観察されるほか遺物の散布も多数見られるため、同斜面上に造営された横穴墓数はまだまだ多いと考えられる。

遅倉５号穴

［松江北東部遺跡（本庄川流域条里制遺跡）］……'95

本庄地区県営圃場整備事業に伴うもので昭和61年から調査が行われており、「京殿遺跡」「原ノ後遺跡」「的場遺跡」など数多くの遺跡が確認されている。

平成７年度は本庄地区の北西側（８工区）の遺跡確認調査が行われた。調査の結果、遺構は確認されず下層から本庄川の氾濫に伴うものと思われる大形の石が多く検出され、遺物は氾濫時に流入したと思われる土師器片や陶器片など数片が出土した。

トレンチ調査の状況

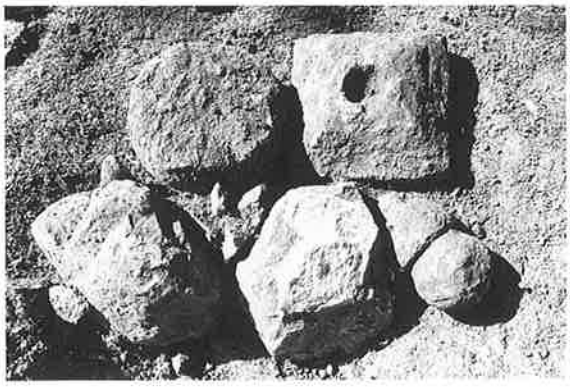
［宮尾（みやお）古墳群・柴尾（しばお）遺跡・柴尾古墓］……'95

◆宮尾古墳群は旧表土が確認された１号墳と周溝らしきものが確認された２号墳の調査を行った。両古墳とも既に削平されている箇所があり、規模や形態などの詳細については不明であった。調査の結果、主体部など古墳に関する遺構は確認されず、遺物も裾部で須恵器がわずかに１片だけ出土し、それ以外は近世以降の陶磁器片などが出土しただけであった。そのため古墳の可能性が低い。

◆柴尾遺跡は平成５・６年度の調査で、黒曜石製の石鏃や破片が多く出土し、縄文土器も出土したため縄文時代の石器製作地と思われた。平成７年度は石器製作地と思われる丘陵の反対側の丘陵から集石遺構や土壙は確認されたが、時期や性格は不明である。石器製作址と思われる丘陵の東側斜面からは縄文時代の撥形を呈したミニチュアの打製石斧や黒曜石製の石鏃、土器片が各１つずつ出土したが、遺構は確認されなかった。別の場所からは須恵器の坏身・坏蓋などが出土したが、同様に遺構は確認されなかった。

◆柴尾古墓は分布調査の段階で五輪塔が１基確認された。調査の結果、土中からもう１基の五輪塔が出土し、その総数は来待石製の空風輪２、火輪４、水輪１であった。その形態から室町時代後期～安土桃山時代のものと推測される。土壙は11基検出され、そのうちに１基は土中から検出された五輪塔の真下から検出されたため、五輪塔に伴う土壙墓の可能性が伺える。それ以外の土壙も〝土壙墓〟の可能性が考えられる。遺物は遺構に伴うものはないが、土師質土器などが出土した。

数年の調査によって柴尾遺跡群は長期間に渡って遺跡が存在していることが確認された。



柴尾古墓五輪塔

［袋尻（ふくろじり）遺跡群］……'95

本遺跡群は最高所約97mを測る丘陵上に位置する。調査の結果、古墳２基、竪穴式住居跡７棟、土壙５基、近世墓２基、基壇状遺構１基、溝状遺構４条を検出した。調査面積は合わせて2,450㎡である。

１号墳は本遺跡群最高所に位置している。主体部は箱式石棺で、主軸はＮ－63°－Ｅである。内法長165㎝、内法幅45㎝を測る。石材の種類は安山岩で、小口に板石状の自然石を１枚、側石には最低３枚の石を並べて、それぞれ立てており、蓋石は最大50㎝の石を少なくとも２段に積み重ねている。地山を掘り込んで安置したものと推測され、棺内から遺物は出土しなかった。盛土の大半は流失していたため、墳裾範囲については不明である。遺物としては土師器、須恵器がそれぞれ細片で出土しており、出土遺物から考察して古墳時代後期頃に築造したものと考えられる。

袋尻１号墳石棺

３号墳の主体部は長方形墓壙で、長さ2.5ｍ、幅40～80㎝、深さ15～25㎝を測り、北東側が幅広に掘り込まれていることから北東側を頭位にしたものと推測し、主体部の主軸はＮ－64°－Ｅで、１号墳とほぼ同様である。埋葬方法は木棺直葬によるものと思われ、墳裾範囲については南北10ｍ、東西は不明であり、墳形は方墳と考えられる。墳頂部表土下より須恵器片、かわらけの皿が出土しており、築造時期については古墳時代中期末以降と考えられる。

竪穴式住居跡は地山を掘り込んで造られており、平面形は隅丸方形及び方形を呈する。後世において、田畑として利用されていたため残存状況はあまり良好ではない。茶色粘質土を使い、貼り床を施したもの１棟、焼失したと思われるもの１棟がそれぞれ検出され、切り合いが確認されたものもあった。出土遺物として弥生式土器（鍵尾Ａ区５号墓式～）、土師器、須恵器があり、弥生時代後期から集落を形成したものと推測する。

近世墓については、１辺70～95㎝、深さ80～140㎝の方形プランで、出土遺物として鉄釘、はさみ、かわらけ、古銭（寛永通宝）がある。鉄釘の形態は四角で、微量の木質が残存しており、40本出土している。はさみについては埋葬者が女性であり、生前に使用したものを副葬したと考えられる。出土したかわらけは、特筆すべきことに底部に孔が穿ってあり、実用としてではなく、祭祀的要素で副葬され、また器壁・糸切り痕の薄いことから、量産品と思われる。埋葬形態は出土遺物から、江戸時代の座棺によるものと考えられる。

今回の調査により検出された集落（竪穴式住居跡７棟）は谷上に位置している。東側に袋尻８号墳、西側に袋尻横穴墓群がそれぞれ隣接し、鍵尾Ａ区５号墓式以降の土器（鼓形器台等）が出土している。このことから、弥生時代後期～古墳時代後期の人々の生活様式、住居跡の変遷、埋葬形態を知る上で貴重な資料に成りうるものと思われる。

［四王寺（しわじ）跡］……'95

本調査地は山代町字師（四）王寺の西端にあたり、茶臼山南麓標高20mに位置する。調査区内は幅１m、道路を挟んで南北約38mの水路であったため、調査区を道路より北側をＡ区、南側をＢ区として２ケ所に分けて調査を行った。

調査の結果、Ａ区からは杭列と石列を検出した。杭列は立杭と横木で、立杭は調査区東側に４本、西側に１本、横木は東側の立杭の間に１本確認された。杭の下部の先端は全て削って尖らせており砂礫層より黒灰色粘質土層に打ち込まれていた。石列は黒灰色粘質土（礫混入）中より調査区東側に３ケ所、西側に２ケ所確認された。石列を検出した位置は杭列と比較的近く、東側の杭と石列はほぼ同じ並びになることからお互いに関連する可能性がある。また、石列の中にはレンガが混入しており明治以降の石列である可能性が高い。Ｂ区からは長さ約９mにわたる石列を検出した。Ａ区と同じく黒灰色粘質土層（礫混入）中に確認された。この石列はＡ区下流側の石列と同じ安山岩で、方位もほぼ同じＮ－10°－Ｅを向くことなどから共に関連したものだと考えられる。

出土遺物は須恵器・土師質土器・瓦・陶磁器などが出土した。須恵器・土師質土器は黒灰色粘質土層（礫混入）と緑色砂礫層より出土した。須恵器は甕片・坏など８点、土師質土器は坏・台付皿など３点である。瓦は古瓦から現代瓦に至るまで表土及び黒灰色粘質土層（礫混入）と緑色砂礫層より出土した。内、古瓦は49点あり軒丸瓦・丸瓦・平瓦の破片であった。軒丸瓦は四王寺Ｉ類に分類されるものだった。陶磁器は18世紀後半頃の陶胎染付の碗などが出土している。

今回の調査範囲は周知の遺跡である四王寺跡のごく一部に過ぎず、後世の水路工事に伴う撹乱の可能性もあるため四王寺跡の寺域内であるのか寺域外であるのか、その判断は明確にできなかった。その中で、新造院創建期の瓦と考えられている四王寺Ｉ類軒丸瓦が出土していることから、本調査区で遺構は検出されなかったものの、近くには四王寺に関連した遺構が存在すると考えられる。

石列検出状況

［大久保谷（おおくぼだに）遺跡］……'95

本調査地は乃白町と大庭町を隔てる峠の南方丘陵に位置し、標高51～62mの北向きの斜面に対して調査区西側の緩斜面と東側の急斜面が中央に向かって谷を形成している。調査の結果、調査区東側から焼土壙が４穴、ピットが11穴検出された。焼土壙は全て第３層から掘削され、土壙内に炭片・灰が堆積し、平面を成す底部は焼けていた。その内、ＳＫ－０４からは性格不明土製品が出土したほかは遺物が皆無で焼土壙の時期・性格共に不明である。また、11穴のピットは住居地が推定されるような配置を示すものではなかった。出土遺物は須恵器・弥生式土器・土師器・土製品などがそれぞれ１片ずつ出土しているが流れ込みによるものと考えられる。

本調査区は松江市教育委員会が平成５年度に実施した試掘調査で検出された焼土壙の性格を確認し、周辺の遺構の広がりを調査することを目的としたが、遺構・遺物とも少なくその状況は判然としなかった。

焼土壙

［川原後谷（かわはらうしろだに）横穴群］……'95

本遺跡は標高20～26mの北西方向に舌状に突き出た丘陵の西側斜面の山林で、尾根筋上には川原後谷古墳群がある。調査区は、凹状の地形別に南へ順にⅠ区、Ⅱ区、Ⅲ区、Ⅳ区とし、調査を実施した。

Ⅰ区では横穴墓の墓道と、これより一段下がった所より方形を成す加工段を検出した。横穴墓の墓道からは丹塗りの土師器のほか、はそう、蓋坏、高坏、壷、甕片などの須恵器が出土している。また、加工段からも高坏の脚部片、壷片、はそう体部片などの須恵器が出土した。

Ⅱ区では丘陵上に存在する川原後谷古墳群による流れ込みとみられる須恵器の甕片が出土したが、遺構は確認されなかった。

Ⅲ区では横穴墓の墓道の可能性がある遺構が検出された。遺物は表土から須恵器の甕片が出土している。

Ⅳ区では遺構、遺物ともに検出されなかった。

以上のように調査地域内では完全な遺構を検出することはできなかったが、この調査中の踏査で川原後谷古墳群とその丘陵西斜面にある横穴墓群が確認できた。

近隣には多くの古墳や横穴墓群が所在しており、今後の調査も大いに期待されるところである。

遺物出土状況

［寺山小田（てらやまおだ）遺跡］……'95

緊急調査の中でも特に緊急に調査をおこなった遺跡で、厳寒期にむけて実施したため、霜や雪などの悪天候に悩まされ続けた現場であった。

調査結果は、古墳時代中期末の竪穴建物２棟、堀立柱建物３棟、性格不明の広場１ケ所ほかを検出した。

この遺跡で注目されることは、遺構面から玉類が散在して出土したことである。具体的には、竪穴建物の床面・直上から赤瑪瑙製の勾玉１点、碧玉製の切子玉１点が出土したほか、掘立柱建物跡から滑石製臼玉60点（以上）が糸で繋がれた状態で出土した。また、性格不明の広場状遺構の地山直上からは碧玉製の勾玉１点が出土した。この遺跡の西に隣接する矢田遺跡（消滅）では滑石製勾玉の出土が伝えられている。狭い範囲の建物跡からこれだけの玉類が出土するケースは珍しいことで、単なる住居内祭祀と考えてよいものか、それとも祭祀のための建物群であったのか、現時点では結論は出せないままである。

そのほか、この遺跡は出土土器の形式にほとんど変化が見られないことから、短期間営まれた後早々に廃棄されたものと考えられ、出土遺物が一括資料として扱える面でも興味深い遺跡といえる。この時期の土師器の様相はまだ明確にされていないし、竪穴建物の同一床面直上から初期須恵器の坏と複合口縁の甕が出土したことも貴重な成果である。

臼玉出土状況